
 <書 評>

杉並組合病院長 川 上 武 著

内 科 往 診 学

東大教授 吉 利 和

書名を見ただけで、まず“おや”という感じをもった。これは偽らない感じである。そして一体どんなことが書いてあるのだろうかという気持ちが湧いてきた。一体「往診学」という学問体系があるのだろうか？さらに、往診というのは、一つの便宜的な診療手段だと軽く見すごしていたことに対して、“おや”という感じをもたざるをえなくしてくれた。

著者によると、往診は一つの独自の診療体系であり、これは、“動く診療室”として把握すべきこと、とくに“動く”ことをめぐってすべてが展開されることに中心があるという。この性格が、同時に長所でもあり、また短所でもある。

私は、この“動く”ことの意味をまず考えたい。これは医師というもののあり方として一つの積極的な面をもっていると思われる。従来の医師と患者との関係は、患者の側から医師に依頼し、医師がこれに対して応答するという形をとっているところが多かった。しかし、これには限界があることが認識されはじめている。一つは、早期診断という点からみて、この関係では、それが困難だということ、もう一つは、著者が行なっている定期往診というものの意

味ということである。この後者において、“動く”ことに積極的な意義が与えられるであろう。

多くの場合は、往診は急患であるが、決してそのみではなく、積極的な意味が理解される必要がある。著者が“外来にくる患者のすべてが、いつか一度は往診といった形で家庭訪問できるくらいの医療条件が、臨床医として最も好ましいことがわかるであろう”といっているが、正直に言って、私自身あまり考えていなかったことを、つかれた感じがする。それは、家庭に入ることによって、疾病の背景について知ることができるということが、概念としてのみ理解されていたことによる。

私としては、このような反省の材料を与えてくれたものとして、本書を高く評価したい。しかし、本書が一般実地医家にとって、きわめて役に立つ本であろうことも強調しておきたい。往診のうけ方、救急や急患の場合の診察や処置、さらに、往診にさいして問題になる、主なる症状や疾患のとり扱い方など、きわめて具体的に示しており、処方例もあちらこちらにある。また、ベッドサイドでの鑑別の要点なども有用であろう。

大学病院にばかりいた者にとって、検査を必要とすることに重点がおかれるが、往診では、その検査にまでもって行く前の段階が重要なのである。具体的病名としてよりも、この範囲のものであろうという目安をつけることも、診断の名に値すると私は考えている。例えば、発熱、腹痛、下痢……などの主なる症状について、その処置を論じているし、往診のさいに、すでに診断の下せるものとして、脳卒中、心筋硬塞、うっ血性心不全がとりあげられている。

すでにのべた定期往診というものの重要性は、ぜひ多くの人に理解してもらいたい。これなくしては、多くの悲惨なる患者が、生きる甲斐もなく病臥しているという状態から脱することはできない。残念ながら、日本の現実には、このことを強調する必要性が、あまりにも大きすぎるようである。

大学にばかりいた私にとっては、あまり考えなかったことを教えられたという意味で感謝するが、それよりも、一般医家が往診の真の意味を理解して、片手間のよけいのことだという気持ちをすてられることを、そして、とくに往診の積極的な意味を理解されることが望ましく、その意味で多くの読者が得られることを希望したいものである。

A 5 版 頁282 図10 円2,000 円90